戦後放送メディアにおける「終戦特集」の形成 NHK短編映画『広島』（1957年8月15日放映）が登場するまで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川島, 高峰 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15073

《応募論文（2011年度）》

戦後放送メディアにおける「終戦特集」の形成
NHK 短編映画『広島』（1957年８月15日放映）が登場するまで

川　島　高　峰☆

The History of the Special Radio & TV Program for Japanese Memorial Day of the End of the War, from 1946 to the Short Film Program "Hiroshima" in 1957

Takane Kawashima

もくじ

序
Ⅰ　研究の諸前提
（ⅰ）　NHK アーカイブス・トライアル研究
（ⅱ）「終戦特集」をめぐるラジオとテレビ
Ⅱ　占領期の「終戦特集」
（ⅰ）「終戦特集」不在の時代　1946～1948年
（ⅱ）　自己検閲の時代　1949～50年
（ⅲ）　独立を模索する終戦報道　『尋ね人』から『君の名は』へ　1951-52
Ⅲ　独立講和からテレビ放送黎明期
（ⅰ）　溢れ出る「原爆」・「被爆」　独立後1953-54
（ⅱ）　テレビ放送黎明期
Ⅳ　「戦後」の登場と対象の多様化
Ⅴ　短編映画『広島』の登場
むすびにかえて

序

夏のテレビ番組として「終戦特集」は重要な定番化した特集である。例年、原爆投下の日の前後から終戦記念日の前後にかけて、必ず、終戦に関連する「特集」が放映されるものである。この放送メ

☆情報コミュニケーション学部准教授

ディアにおける「終戦特集」とは、そもそも、どのようにして始まり、形成されたのか、これを明らかにすることが本稿の目的である。

「終戦特集」とは、８月初旬から終戦記念日にかけて放送される番組のことであり、1945年８月15日に「終わった」戦争をめぐる日本及び日本人の戦争体験やそれに関連した主題で作成される放送番組のことである。

「終わった」としたのは、この戦争の始まりを、満州事変まで遡るのか、対英米開戦からとして捉えるのか、つまり、戦争の始まりについては、番組作成者の視点により異なるからである。この「終戦」という表現は、敗戦後の日本社会で八月十五日を指す言葉として広く定着したものであった。「終戦」と呼びならわしたのは、「敗戦」という表現を避けたい心理があったためである。これは当時、「占領」という言葉を嫌ったために、「占領軍」を一般に「進駐軍」と称していたのと似ている。こうした呼称の仕方に、日本人には戦争を遂行した「主体」として自覚や責任感がないという問題点を指摘することもできるが[1]、敗戦記念日と呼んだのでは「記念」としては恰好がつかない。そもそも、敗戦の日は公的な記念日ではない。それにもかかわらず、８月15日は「終戦記念日」と言い習わされてきた。「終戦記念日」が特別な意味を持ったのは、日本人にとって８月15日が〝戦争と軍国主義の時代〟と〝平和と民主主義の時代〟の分水嶺となっており、現在の日本並びに日本人の思想史的、精神史的な位置を確認する重要な転換点となっていたからである。

この終戦の精神史的な考察は日本研究の重要な主題の一つであり、筆者にとってもライフワークであった[2]。今回、その研究の一環として「終戦特集」の放送番組を取り上げることとしたが、その契機となったのはNHKアーカイブス・トライアル研究への参加であった。トライアル研究では、NHKアーカイブスが所蔵する過去の番組を学術研究の目的に限定して閲覧することができる。そこで筆者は、「終戦特集」のテレビ番組について、テレビ放送が開始された1953年から1970年代までの特集番組を対象に調査研究することとした[3]。1963年生の筆者にとってテレビの「終戦特集」は物心ついた時から夏のテレビの定番であった。そして、筆者自身もNHK終戦報道特集の番組作成に関わったことから、「終戦特集」に対する思い入れは人一倍、強いものがあった[4]。実はこの思い入れの強さ故にいくつもの「つまづき」に遭遇することとなったが、それはまた次のような「意外性」の発見につながった。

1　筆者が監修したNHK終戦報道特集「敗戦、その時日本人は　第一部」の「敗戦」という呼称は、まさにこうした意識からつけられたものである。

2　川島高峰「戦後民主化における秩序意識の形成」、日本政治学会編年報政治学『ナショナリズムの現在／戦後日本の政治』岩波書店（1994）、川島高峰「敗戦前後における秩序意識の変容と形成　―天皇制ファシズムから天皇制デモクラシーへ」明治大学大学院博士（政治学）論文（1997年３月26日）。

3　研究主題「同時代型社会の象徴『終戦報道』の検証を通じた新しい大学教育理念『ドキュメンタリー教養』の構想とその情報インフラ整備の調査」。

4　NHK終戦報道特集「敗戦、その時日本人は　第一部」（1998年８月15日）、筆者の学位論文を元として作成した。ETV特集「マッカーサーへの手紙」（1999年５月26日）番組監修・出演。NHK終戦報道特集「敗戦ニッポン・新しい日本人をめざして―戦後教育の原点はこうして生まれた―」（1999年８月15日）、資料提供。

第一に、当初は「終戦特集」の形成過程をテレビ番組としてのみ考え、テレビ放送開始の1953年からを考察の対象としていた。しかし、研究調査の過程でテレビの「終戦特集」には、その先行形態としてラジオによる「終戦特集」の存在があることが判明した。そこで、本論文では占領期の1946年のラジオ番組から1957年８月15日に放映されたNHK最初期の「終戦特集」、「短編映画『広島』」が登場するまでの放送メディアによる「終戦特集」の変遷をまとめることとした。

第二に、ラジオ番組の録音記録は殆ど存在しない。また保管されていたとしても視聴が許されるものは殆どない。従って、ラジオ番組の検証はその殆どが新聞の番組表や番組評による分析となった。そこで終戦の日や原爆の日の報道の傾向を知る指標として、朝日新聞社のコラム「天声人語」・社説などを用いた。限られた史料の中でも、占領下の報道検閲の時代における「終戦特集」形成の前史について、一定の輪郭を与えることはできたと考える。

第三に、テレビ放送は1953年から始まったが、最初の終戦特集が登場するのは1955年であり、残念なことにその番組記録は保存されていなかった。「短編映画『広島』」は、保管されている番組記録の中で最古の「終戦特集」番組であるが、実際に放映された最初の「終戦特集」ではない。しかし、1955年の終戦の日にテレビ放映された特集番組は、番組表の番組タイトルからだけの判断となるが、戦後10年の年であったこともあり、「終戦特集」というよりは「戦後特集」の観が強かった。また、1956年のテレビ放送による終戦特集は、後に触れるが低調なものであったため、1957年に放映された「短編映画『広島』」を実質上、最初期の「終戦特集」のテレビ番組とみなすことができる。1957年、まだまだ放送メディアはラジオ全盛の時代であり、当時のラジオ番組が作っていった「終戦特集」の趨勢を象徴する形で、「短編映画『広島』」が登場したのである。

本稿は、こうした「終戦特集」形成の前史について、「Ⅰ　研究の諸前提」で、まずトライアル研究の紹介を行い、そして、敗戦後から1950年代までの放送メディアを概観する。ついで「Ⅱ　占領期の『終戦特集』」では、1946年から48年、事前検閲制の下に報道が最も厳しく規制されたていた時期を「(ⅰ)「終戦特集」不在の時代」として、次いで事後検閲もしくは検閲制廃止以降の1949年から50年の時期を「(ⅱ)　自己検閲の時代」として、そして、独立講和前後の1951年から52年、徐々に終戦報道が反核へと向かっていった時期を「(ⅲ)　独立を模索する終戦報道」として、以上三つの時期区分から分析する。「Ⅲ　独立講和からテレビ放送黎明期」では、1953年から54年、自己規制から解き放たれ独立後の二年間を「(ⅰ)　溢れ出る『原爆』・『被爆』」として、実質上、独立後、最初の原爆の日・終戦記念日となった報道の傾向について触れる。そして、この時期に始まったテレビ放送の終戦特集を「(ⅱ)テレビ放送黎明期」としてまとめた。「Ⅳ　『戦後』の登場と対象の多様化」では、戦後10年の年から1957年までの３年間に、60年代のテレビ放送における「終戦特集」の基本的要素が、ラジオ番組が主導する中で形成されていった状況をみていくことにする。これらの変遷の終着点、そして、戦後のテレビによる終戦特集の出発点を「Ⅴ　短編映画『広島』の登場」として、同番組の内容の紹介とともに本論をまとめることにした。

Ⅰ　研究の諸前提

（ｉ）　NHK アーカイブス・トライアル研究

NHK アーカイブスは番組数約70万、ニュース項目約490万という世界屈指の膨大な放送記録の保管をしている。そして、その学術・研究目的の利用について公募を実施したのが NHK アーカイブス・トライアル研究である[5]。通常、過去の放送番組の殆ど全ては個人的に記録をしていない限り、その再生・閲覧は不可能であり、その検証は新聞・雑誌等の文字媒体による記録を手掛かりとするしかなかった。従って、学術目的という限定的な公開とはいえ、トライアル研究は実に画期的な試みの始まりであった。同アーカイブスは国民の資産とも言えるが、個人情報保護、著作権等、その公開には様々な課題があり、当面は学術目的に限定した公開という試験的な運用を通じて、今後のアーカイブス利用の方法を模索する点にこのプロジェクトの目的がある。

トライアル研究は2010年３月から開始され、当面は、一期を半年間で構成し、四期の実施としている。それ以降（2013年）の運用については未定である。トライアル研究員はこの一期半年間の間に最大で50日間の閲覧施設の利用ができる。但し、閲覧は自己の研究主題に沿ったコンテンツに限られる。巻末に著者が閲覧を認められた番組の一覧を示しておく。

次に、コンテンツの検索と閲覧の実際について述べておく。筆者が自身のトライアル研究の主題に則して閲覧できた番組は全体で21件であった。当初、もっと多くの番組が閲覧できると思いこんでいた。つまり、テレビ放送が開始された1953年から70年まで少なくとも毎年一本は終戦特集の番組があり、合わせて少なくとも18本、そして、さらにおそらくは各年、数本は終戦特集関連の番組があるとの見込みから50本前後の閲覧を想定していた。

しかし、NHK も含め、最初の終戦特集がテレビ放送に登場したのは1955年のことであった。そして、残念ながらこの55年の時の終戦特集番組は NHK アーカイブスに保管されていなかった。そもそも、新聞等の番組表に記載されている番組の全てが保存されているわけではない。テレビ放送が始まった50年代、60年代はテープそのものが貴重品であり、一度、撮影したテープを他の番組のために再利用することがよくあったためである。また、番組を保管する習慣が確立されていなかったようである。このため公募前に利用できる番組検索システム（http://archives.nhk.or.jp/chronicle/）でのヒット件数は番組表のそれよりも少ないものとなった。

次に検索の実際問題として、例えば、「終戦」で検索をすると選手権等の「最終戦」も入ってきてしまう。また、日清戦争についての終戦なども入ってきてしまう。検索はタイトル検索が主であり、戦争に関する番組が、必ずしも、タイトルを一見しただけでそれと判る題名をつけているわけではない。

5　NHK アーカイブスのホームページ　http://www.nhk.or.jp/archives/academic/。なお、同アーカイブス・トライアル研究実行委員会は、その目的を「メディア研究にとって、またこれまで蓄積されてきたコンテンツの教育利用や次世代の映像文化の作り手の育成にとって」持つ可能性を、さらに「21世紀の学校教育や生涯教育、教養形成のために再利用していく可能性」を模索することとしている。

タイトル上は、戦争に関することを扱っていそうな番組でも、閲覧をしてみると、そうではないこともある。結局、基本的に番組は見てみなければ判らないのである。

また、アーカイブスに保存されていても、必ずしも閲覧が出来る訳ではない。閲覧できるのは、オリジナル録画媒体から、SVHS や DVD といった閲覧用の媒体に複写されているものだけである。特に初期のものはテープそのものが古く劣化していたり、再生用の機材そのものが言わば骨董品的な機械を利用しなければならなかったりするので、トライアル調査での閲覧はできなかった。この閲覧可能か、否かを特定できる検索システムは、非公開の NHK 局内用の検索システムによらなければならない。つまり、研究者は応募段階では一般公開された検索システムしか使えないので、公募に選ばれた後に、改めて、この局内用の検索システムで確認をする必要がある。

(ii) 終戦特集をめぐるラジオとテレビ

筆者は閲覧した番組が、当時の新聞紙面上の番組評でどのように書かれていたのかを確認することとした。そして、この作業を通じて実のところ「終戦特集」の起源はテレビ番組ではなくラジオ番組にあり、50年代はラジオが放送メディアの中心であったことを改めて認識することとなった。50年代、「番組」と言えば「見るもの」ではなく、「聴くもの」だったのである。

テレビ放送の開始は1953年であり、1951年８月まで放送は、日本放送協会のラジオ一局のみであった。つまり、敗戦後の放送メディアの中で「終戦」関連の番組を組み入れる余地は極めて少なかったのである。戦後、最初の民放となる中部日本放送が開局したのが1951年９月１日のことであり、この51年の終わりまでに、新日本放送（後の毎日放送）、朝日放送、ラジオ九州、京都放送、ラジオ東京（後の東京放送）が開局した。これにより、ラジオ放送の言論空間は拡がったが、占領期、報道は占領軍による検閲の下に置かれていた。従って、日本のメディアが占領軍に遠慮することなく日本人の戦争について語ることができるようになるのは、1952年の独立講和以降である。

テレビ局は、1953年（昭和28年）２月１日に日本放送協会がテレビ放送を開始し、同年８月に最初の民放テレビとして日本テレビが放送を開始した。しかし、当面はラジオが内容的にも普及率においても放送メディアの中心であった。1955年（昭和30年）４月１日、現 TBS のラジオ東京がテレビ放送を開始したが、55年でもテレビの普及率はわずか0.9%に過ぎず、世論への影響は大きなものではなかった[6]。このころは、所謂、街頭テレビの時代であり、テレビ番組で注目されたのは相撲やレスリングといった娯楽やスポーツ番組であった。番組内容への注目度は勿論、高いものであったが、むしろ、スポーツ・イベントへの国民的な関心が、結果として、テレビの存在を宣伝する契機となった。

また、テレビ番組の内容がラジオ番組と比べて独自性を持つ段階にはなかった。実際、NHK テレビの初期の代表的なドキュメンタリー番組の多くは、ラジオ番組からの継承と思われる。「教養特集」、

6　テレビの普及率は、経済企画庁『年次経済報告』(1957)・「通信の発展と近代化」、同（1958)「景気下降と交通・通信」、同（1959)「昭和33年度交通・通信の概況」、同（1960)「通信」、同（1961)「通信」、同（1962)「物価高騰と消費水準の動向」より。数値は世帯普及率。

「明るい農村」などは同じタイトルの番組がテレビに先行してラジオに存在した。

ラジオの優位は新聞の紙面にも表れている。民放で逸早くテレビ局を開局させた読売／日本テレビであったが、読売新聞の番組表ではラジオ欄の下にテレビ欄があった。番組表の面積比は、テレビとラジオでは放送局の数で絶対的な差があるので仕方がないが、ラジオ欄の方が数倍も広い。番組評のコーナーでもラジオ優位であり、テレビ番組が取り上げられることは殆どなかった。読売新聞の番組評のコーナーは、朝刊は「卓上放送」、夕刊は「ききもの」であり、これ以外に「ラジオ週報」があった。テレビ評はそこに間借りする形で掲載されていたのである。番組評のコーナーが「ラジオ　テレビ」となるのが、1956年からであり、同じく56年から「テレビ週報」が登場する。それでも、56年、テレビの普及率は2.2%に過ぎない。新聞メディアとテレビの経営関係もまた、テレビの普及には極めて重要であった。というのは、この時代、テレビを紹介し、宣伝する最大のメディアは新聞だった。そもそも、当時は番組情報を知る事実上、唯一の手段が新聞のテレビ欄であった。

1959年２月、日本教育テレビ（現テレビ朝日）が本放送を開始し、翌３月に現フジテレビが本放送を開始した。今でこそ、テレビ朝日と朝日新聞社は系列関係とみなせるが、設立当初の日本教育テレビは、発足主体の中心は日経新聞であった。東京タワーからの放送開始は1958年12月23日なので、59年という年は、首都圏の電波の受信状況の改善が図られ、現キー局が出そろった年ということになる。57年に5.5%であったテレビ普及率は、58年に13%、59年23.1%と倍々に増加し、60年に38.2%、61年には48.9%と約半数の家庭にテレビがあることになる。従って、国民的な意識形成にテレビが影響力を行使するための環境が整ったのは60年代からとみなすべきだろう。

Ⅱ　占領期の「終戦特集」

（ｉ）「終戦特集」不在の時代　1946～48年

占領軍にとって、日本人の戦争の回顧は政治的に常に微妙な問題を持った。戦争の回顧は、ともすれば、反米感情や占領政策への批判につながる可能性があり、殊に空襲や戦闘での日本人の戦争体験は加害者としての米軍の輪郭を浮かび上がらせ、反米意識の要因となるので厳しく報道規制を受けた[7]。通称、プレス・コードとして知られる指令は1945年９月21日付で出され、1945年10月からは新聞・図書に対する事前検閲制度が開始された。事前に原稿等を提出し許可されたものだけが発表できる事前検閲制は、1946年中には全国で展開され、1947年から事後検閲へ切り替えられようになった。しかし、この切り替えは、一斉にというわけではなく、媒体により実施時期が異なった。1947年３月にはラジオ番組が事後検閲となり、朝日・読売・毎日といった全国紙が事後検閲に移行となったのが1948年の７月である。図書・出版は1948年９月には全て事後検閲に移行した。そして、検閲制度は1949年11月には廃止される。移行と表記したが、例えば、新聞は全ての新聞が一斉に事後検閲に変更

7　占領下の報道検閲については、江藤淳『閉ざされた言語空間』文藝春秋（1996）。

となったのではなく、少しづつ事後へと変更してゆき、最後に全国紙が移行されたのである。移行を認められない新聞もあった。

こうなると、検閲を受ける側にしてみれば、例えば、新聞で当局の規制を受ける内容を、ラジオなら大丈夫と考え、報道することは中々できるものではない。また、新聞社同士でも、ある新聞社が事前検閲の下にあれば、たとえ自社が事後検閲に移行していたといっても、自社だけは報道できると気楽に思うことなどできるはずがない。つまり、媒体により規制の変更時期が異なったことで、その検閲の効果は、実質上、全ての媒体が移行を完了させるまでは、全体を一律に規制しているのと同じ効果を持ったのである。

また、検閲廃止後もプレス・コードは残された。そして、このプレス・コード以上に猛威を振るったのが「勅令第311号」である（憲法公布後、「政令325号」）。勅令311号の正式な名称は「聯合国占領軍の占領目的に有害な行為に対する処罰等に関する勅令」であり、政令325号は「占領目的阻害行為処罰令」であった。何が「占領目的に有害」であり、何が「占領目的阻害行為」であるかは、専ら、占領軍の側が判断することであり、軍国主義も、共産主義も、共に抑圧の対象とされた。従って、占領期の放送番組表から伺える終戦の日の放送には、本稿が定義したような「終戦特集」の番組は中々、見当たらない。

他方、戦争への反省が民主化や非軍事化へつながる要素についてはこれを容認した。特に、占領下の報道で「優遇」されていたのが戦犯裁判に関する情報である。しかし、東京裁判への注目は、もし、その裁判そのものが不当である、あるいは、日本の戦争責任を否定し、日本の戦争が正義であることを主張する契機となったとすれば、むしろ、アメリカにとって報道を規制した方が良いわけである。占領軍当局にとって〝幸いなことに〟占領下の日本人の意識は、微妙な紆余曲折を経ながらも、米軍への憎しみが、日本軍国主義に対する憤りを超えることはなかった[8]。

占領下の報道規制を象徴したのが原爆であった。原爆をめぐる主題を「特集」として行うことは、占領下のメディアでは不可能であった[9]。表Ｉは、朝日新聞・聞蔵、読売新聞・ヨミダスの検索システムを利用して、「原爆」を検索キーとして記事件数を調べた結果である。この表からも明らかなように、原爆報道の記事件数は、検閲制度の変更・独立講和・ビキニ事件を転機として変化をしている。1948年までを「終戦報道」不在の時代としたが、これは事前検閲の時代と言える。1949年以降は、事後検閲もしくは検閲廃止の時代であり、プレス・コードなどを意識した自己検閲を余儀なくされた時代であった。

次に、事前検閲の時代の終戦特集を見ていくことにする。

1946年終戦の日の朝日新聞の社説は「ポツダム宣言受諾一周年」と題されていた。「日本民主主義革命は、ポツダム宣言受諾の必然の結果」といった文言から読み取れるのは、８月15日に回顧すべきは

8　川島高峰「手紙の中の『東京裁判』」、『年報日本現代史』（2008年５月30日）。
9　堀場清子『原爆　表現と検閲』朝日新聞（1995）。

「終戦」や「戦争体験」の意義というよりは、「ポツダム宣言受諾」や「民主主義」の意義だったのである。「天声人語」においても、「一年前の八月十五日は、旧い日本を防空壕の中に埋葬した日であった」と始まり、「敗戦と降伏の日ではあったが、自由日本、平和日本がへその緒を切った日」としており、「終戦の日」という形容さえ見られない。それでも、「天声人語」では、この一年間の民主化への日本人の関わりについて「ヘマもした。怠けもした。けれども生麦事件の再演をやって占領政策を妨害するほど馬鹿でもなかった」と実に際どい表現をみせていた。この〝際どさ〟は、８月13日、「ビキニ第二次実験」(戦艦長門等を標的とした原爆実験) を伝えた見出しにも読み取ることができる。そこでは見出しに「有害なラジオを放射」と書かれ、核兵器への批判を読み取ることができた。

キーワード「原爆」による記事検索結果

	朝　日 年間	朝　日 8/5 - 16	読　売 年間	読　売 8/5－16
1945	191	43	149	52
1946	88	4	126	2
1947	34	5	42	4
1948	20	3	45	1
1949	144	5	134	10
1950	108	3	241	7
1951	99	6	182	9
1952	136	19	212	19
1953	137	14	217	19
1954	496	31	444	35
1955	282	48	353	47

年間の記事件数と８月５日～16日の期間の記事件数の比較である。

次に1946年８月の広島、長崎の原爆の日、終戦の日のラジオ番組について述べる。番組表上の番組タイトルから原爆の日にこれに関わることが放送された痕跡はない。終戦の日のラジオでは、「ポツダム宣言受理の日を迎へて」(８時～)、『時の朗読』では「世界平和の為に捧ぐ」(13時～) が放送された。19時30分からは、NHK 第一では「トルーマン大統領のメッセージ『新生日本国民に寄す』」が、NHK 第二では座談会「外地で迎えた八月十五日」が放送されていた。

1946年の「天声人語」が災いしたのか、47年の終戦の日の「天声人語」は「終戦」について一言も触れていない。1949年から53年までの終戦の日の「天声人語」は全て「終戦」について触れていたことを考えるとこれは異様である。47年の「天声人語」はこの日、再開された民間貿易について述べ、国際市場に出るに際し、「あらかじめみずから省みるところがなければならぬ」と結んでいた。

次に1947年の原爆の日から終戦の日にかけてのラジオ番組を検討してみると、番組のタイトル上、

「終戦」という言葉を用いたものは殆どなかった。６日から９日の四日間の毎夜、全部で75分間をかけて「戦争裁判報告録音」が放送されており、この東京裁判が、言わば終戦特集となっていた。また、８月14日、片山哲首相により「これからの日本人」（７時30分～９時30分・18時45分～19時30分）という番組が放送された。現職の総理により、事実上、終戦の日に行われた呼びかけの放送は異例のことである。『朝日新聞』は14日の一面トップの扱いで、この放送を「終戦二周年を迎えて」との見出しで伝えたが、番組タイトルは「これからの日本人」であり、番組表上でも「終戦」という表記は見当たらない。片山首相の放送は科学、芸術、勤労、平和の四つの尊重を求めたものであった。この放送は紙面で紹介されたものである以上、事前検閲、つまり、日本政府－占領軍の合意により草稿が準備されたとみなしてよいだろう。これ以外では、管見の限り番組表上、「終戦」を表記した唯一の例外が、14日放送の番組「街頭録音」である。この日の主題は「終戦二年回顧」であった。

1948年、終戦の日の朝日新聞「天声人語」はアロハシャツが題材である。新聞社のコラムとして、「天声」として「人語」を語る場として、これは異様と言わざるを得ない。先にも述べたように、「終戦」という言葉の定着、この日に対する国民的な実感からずれたコラムであった。もっとも、アロハシャツの流行に冷ややかなコラム氏は「日本人のアロハもよく言ってコスモポリタン趣味、悪くすると男性の中性的女性化」であるとし、「幣原氏は中央政党は男でもない女でもないモノを生むことだと言っているが、中性的化けが女にも男にも多くなったようだ」と結ばれていた。今日からするとジェンダー・ハラスメントと受け止められる物言いだが、読みようによってはアメリカ化に対する痛烈な批判とも取れる。検閲下の終戦の日ならではのコラムだったのかもしれない。

1948年の「終戦の日」は、占領軍当局にとって、要「治安監視」の日となっていた。この日、当局は当時、国鉄で頻発した労働争議（争議権をめぐる争議でもある）と関連して、「デモ集会制限令」の「五大都市での制定」を検討していた[10]。警視庁では終戦記念日の集会デモを都内では全面禁止とし、各労働組合が共催で予定していた「平和擁護要求貫徹大会」などは中止を余儀なくされた[11]。この当局と労働勢力の方向性は真逆であるが、双方に共通するのは国民的なメモリアル・デーが政治的動員に価値を持つ日であることを理解していた点である。日本並びに占領軍当局にとって、終戦の日は、たとえそれが平和と民主主義を掲げるものであろうとも、共産主義や民族主義の台頭を促し反米・反資本主義を助長するものであれば、規制の対象となるのである。

この年の終戦関連のラジオ放送は、1948年８月６日に、NHK 第一放送で広島から「平和祭実況」（８時～９時30分）が行われ、第二放送では夜７時30分から「放射能と人体」という番組が永井隆により行われていた。原爆の放射能が人体に悪影響を及ぼすという主題は、占領軍が好まない放送主題であり、実際の放送内容を確認できるものがないのが残念である。また、終戦記念日には第一放送で13時から一時間をかけて討論会「世界平和達成は可能か」、夜の８時30分から９時45分までを「終戦三周

10 『朝日新聞』1948年８月10日。
11 『朝日新聞』1948年８月15日。

年を迎えて」、そのあと９時45分から10時までを「引揚促進全国大会実況」が放送された。

（ii）　自己検閲の時代　1949～50年

1949年、終戦の日の「天声人語」は「十五日はお盆である。同時に終戦記念日である」と始まり、「旧日本の埋葬日であると共に、新日本の誕生日」であるとし、「お盆には親しかった人々の精霊は迎えても、旧日本の亡霊は迎えてはならぬ」と結ばれた。この時期は、検閲制度の廃止が目前であったが、未だ、事後検閲の時代であり、プレス・コードや政令325号があることに変わりはない。もし占領政策の逆コースを「旧日本の亡霊」という表現に託してプレス・コードに抵触することを回避していたとするのであれば、中々、見事な書きぶりという見方も可能になろう。

1949年から原爆に関する記事件数が増えるが、49年８月６日に掲載された『朝日新聞』の社説「広島に残る『生きた影』」は、広島が復興をしていく他方で「市中には、あの恐ろしい日の生きた影が残っている」とし、原子爆弾を二度と使ってはならないとしていた。しかし、同時に原子力の平和利用を、「原子爆弾がそれ自身いだいていている悩み」の解決方法であるとし、「原子力の平和的目的にのみ利用するという、偉大な、尊敬すべき、すべての人々を完全に納得させ、承服させ得る道がのこされている」としていた。そして、軍事利用に代わり、平和利用の「偉大な道」が選ばれる時がいつか来るだろうとし、その時が来るまで「石段に刻印された『生きた影』は不安にみちた時のさけびをやめようとはすまい」と結んでいた。

この社説に言う「すべての人々」に被爆者は含まれるのであろうか。未だ、被爆者の実像を踏まえた言論には至っていなかったが、報道は検閲を意識しながらも、少しづつ伝えたいと考えることを表面に出し始めていた。

ラジオでは1949年８月６日にも「広島平和祭式典中継」が行われたが、放送時間は９時15から30分間と前年よりも短縮された。14時から放送されたNHK交響楽団による土曜コンサートは、「平和への序曲広島を偲ぶ」と題されていたが、番組表では「音楽　NHK交響楽団」とあるのみで、その狙いが判らない。ところが番組の解説記事をみると「広島原爆遭難の小倉朗が犠牲者の霊にささげる」ものとしてベートーヴェンの交響曲第七番イ長調を演奏する、ということが判る[12]。これも占領軍を気にかけての方法だったのだろう。犠牲者を偲ぶ、慰霊すると明示することはまだ行われなかった。

1950年、終戦の日の「天声人語」は「十五日は終戦記念日である」と始まる。「この日に生まれ変って民主化五歳の誕生日を迎えた」とするが、「本当は『戦後』なのか、新たな『戦前』の様相を帯びてきたのか」と問い、世界情勢の帰趨を「世界の指導者に訴えるほかない」と結ばれていた。1950年６月25日に勃発した朝鮮戦争を踏まえての終戦の日のコラムであった。敗戦後の原爆の日の「天声人語」で、最初に原子爆弾が登場したのが1950年８月９日のコラムであった。しかし、その文面は当時の情勢を踏まえないと、内容的には脱文脈的で唐突な登場と思われるだろう。この日のコラムはブラジル

12　『読売新聞』1949年８月６日。

で行われたサッカーの世界選手権の模様を伝えるところから始まる。この選手権でウルグアイが優勝し、ブラジル国民が意気消沈した様を「まるで敗戦後の日本人の虚脱にも似たしおれ方」と評し、「フットボールの試合に国民的感激の頂点があるとは、やはり太平楽の国」との現地からの手紙を紹介した後のことである。「南米の人たちはたとえ第三次世界大戦が起こっても南米だけは戦場にならぬと思っている。原子爆弾の雨が降っても、南米の人間だけは生き残ると固く信じているかのようだ」。これが戦後の原爆の日の「天声人語」における原子爆弾の初出であった。朝鮮戦争勃発の直後であり、当時の日本にとってそれは、世界大戦も、核兵器の行使も極めて現実的な危機と受け止められていたのである。コラムというものは、通常、掲載日を意識して書かれるものであり、原爆の日に、原爆に触れないできたということは、やはり、意識して触れないようにしたという面があったのではないかと考える。そして、1950年、朝鮮戦争勃発という重大な危機の表現として、ついにコラムに原子爆弾が登場した。しかし、この他方、1950年の原爆の日、終戦の日のラジオ番組については、特筆すべきものを見出すことができていない。これは朝鮮戦争による影響が大きいためであろうか。朝鮮戦争下の放送に対する検閲は今後の課題であるが、この時期の反戦平和運動は、北朝鮮系在日コリアンの団体や、非合法化した共産党による中核自衛隊などによる実力行使型の運動が占領軍により最も厳しく取り締まりの対象とされていた[13]。

1949年から50年を自己検閲の時代としたが、検閲が緩和から廃止へと向かう他方で、逆コース・朝鮮戦争の勃発という危機の時代にあり、さらにプレス・コード、政令325号の脅威に対し、発信者は自身でその発信内容を自己検閲しながら発信しなければならなかった。それが時に不自然なコラムとなって現れたのであろう。また、占領期のラジオ番組の検証は、番組表自体が紙面の関係から限られていること、番組紹介記事も極めて少ないことから検証が困難である。「街頭録音」や、先に見たNHK交響楽団の音楽番組のように、文字媒体や番組タイトルだけでその内容を理解することは難しいものもある。従って、ここで紹介はしていない番組で様々に戦争の回顧と展望が行われていた可能性もあるが、本稿が定義したような「終戦特集」に該当する番組はなかったと言ってよいだろう。日本人による日本人の回顧が主体的に情報発信されたものという観点からすれば、検閲下の報道に、主体的な「終戦特集」を求めること自体に無理がある。〝日本人の日本人による世界平和のための放送〟を理念とするのであれば、〝占領下の被占領による占領のための放送〟とならざるを得なかったのである。

(iii) 独立を模索する終戦報道 『尋ね人』から『君の名は』へ 1951-52

このようにみていくと占領下のラジオは国民の戦争体験や記憶をメディアとして伝えなかったような印象を読者に与えてしまうが、これまでの分析は「終戦特集」、つまり、原爆の日、終戦の日に行われた「特集」番組に関する分析である。それ以外の放送日や、あるいは、通常の番組の中で戦争体験

13 川島高峰『米軍占領下の反戦平和運動』現代史料出版（2000年10月）。

が様々に語られていたことは間違いない。こうした文字テキストには残らない音声・画像メディアの分析というのは今後の大きな課題であるが、ここでは、占領期、戦争体験に関する国民的な番組『尋ね人』について指摘をしておく。

『尋ね人』は、1946年７月から開始され月曜から金曜まで毎日、放送された。番組名は、「引揚便り」、「引揚便りと尋ね人」などと時期により異なり、放送日も月曜から土曜ということもあった。戦争により離散を余儀なくされた肉親、消息不明となった家族・知人を探し求める場として放送されたこの番組には、1956年末までの間に15万5579通の申し込みがあり、このうち８万9008通を放送し、２万4106件の『尋ね人』の消息が判明した[14]。1957年８月時点で一日平均30通の申し込みがあり、一回の放送で15件を紹介していた。なお、この件数については、これをもっと少なく見積もる見方もあり、実数については今後の課題である[15]。戦争により行方が分からなくなった肉親・知人の消息を求めることは当時の日本国民の一大関心事であった。例えば、占領期、日本人はダグラス・マッカーサー元帥や占領軍当局に50万通に及ぶ投書を行っていたが、この膨大な書簡の山の中で圧倒的多数を構成していたのが引揚に関するものであった[16]。シベリア抑留に対する引揚の早期実現を求めるものが中心となるが、地域別にみると復員実現を求める書簡はかつて日本軍が展開した全戦域に及んでいた。それは戦後日本人の心の叫びであった。

サンフランシスコ講和条約は、1951年９月８日に署名され、翌1952年４月28日に発効となる。新聞・放送メディアによる終戦をめぐる言説は、この独立講和を前後に、被占領からの脱却を模索し始める。それを終戦記念日の『朝日新聞』とラジオ番組表から検証する。

1951年の終戦記念日の「天声人語」は「八月十五日が降伏のあの日から七たびめぐってきた」と始まり、「ことしの終戦記念日が例年と異なっていることは、一か月以内に講和の調印をひかえていること」とし、講和をめぐり米ソ対立が現れた現実に「日本人の表情は、片ほおは笑っているが、他の片ほおは笑えない」と結ばれた。

1951年の終戦記念日のラジオ番組は独立に向けた日本人の心構えや考え方を問うものが中心となった[17]。NHK 第一では座談会「日本人の考え方」（午前７時30分～８時）を放映していた。「終戦の日から国家優越感を失って劣等感を持つに至った日本人が近く講和を迎えるに当って今後考え方をどう改めるべきか」を目的として、かつて日本国憲法制定を担当した金森徳次郎、敗戦後の1945年から46年

14　『読売新聞』「放送塔」1957年８月９日。

15　『放送の五十年　昭和とともに』日本放送出版協会（1977年３月20日）、『「放送文化」誌にみる昭和放送史』日本放送出版協会（1990年３月20日）によると依頼総数19,515件、解決件数6,797件となっている。しかし、放送回数が少なくとも4000回はあると想定でき（1962年３月末まで放送）、件数については今後の課題である。また、『読売新聞』1955年７月31日（夕刊）によると、「尋ね人の時間」は月～土曜日の午後３時から５分間であり、発足当初は毎週400通から500通の書簡がきた。そして、54年の統計として「申込件数6232件」で放送されたものが4575件、放送により「巡り会えたもの」1263件とされている。また、占領期のラジオ番組表を見ていくと、一日に複数回放送されていたこともあり、これらの各件数の実数は、当面はより多く記録しているものほど実態に近いとする立場をとることにしたい。

16　川島高峰「マッカーサーへの投書に見る敗戦直後の民衆意識」明治大学社会科学研究所紀要第31巻第２号（1993年３月25日）、19-32頁。川島高峰『敗戦　占領軍への50万通の手紙』読売新聞社（1998）、川島高峰「手紙の中の『東京裁判』」、『年報日本現代史』（2008年５月30日）

に文部大臣を務めた前田多門、朝日新聞社主幹・笠信太郎らが対談を行っていた[18]。

1952年８月15日の「天声人語」は「八月十五日は終戦七周年の記念日」と始まり、冷戦の深化、逆コースの動向に懸念を述べると「七年前の敗戦の苦しみを忘れるようでは、同じ過ちを繰り返すことになる」と結ばれた。この日、NHK 第一の番組『教養特集』は「日本人の良さ悪さ」と題し、長谷川如是閑の話を放送していた。そもそも、独立講和の原因として敗戦・終戦があるので、1951年、52年の終戦の日の論調が、戦争体験の回顧よりは独立に向けた意識の問題が中心となったのは当然である。

そして、まさにこの独立に向けた意識の中で、原爆の日の日本のメディアは真に語るべきことを語り始めた。1951年８月６日、広島原爆の日の『朝日新聞』の社説「原爆六周年」は次のように訴えた。

> 本社の長崎支局の一員は、支局に出勤後、爆心地付近の住宅で一瞬にしてすべての肉親を失った。自宅付近にはせもどった彼が発見したのは、ネコの焼死体のような数個の黒い塊りで、たれとも見分ける由もなかった。〈中略〉 原爆の火と爆風のもとで生じた限りなき人間の悲劇は、ほとんど伝わっていないようである。それを伝えることこそ日本人に割り当てられた仕事であったろうに、今日にいたるまでわれわれはまだ日本人の手になる科学的な被害報告を目にしないのである。〈中略〉 広島の惨禍は、日本人の手によっては、日本人にあまねく知らされていないのみか、また海外にも伝えられていない。〈中略〉 原爆六周年の記念日が、前大戦の最後の悲劇の真実を、日本人の手によって、日本人に、また世界の人々に正確に伝えられ、訴えられる機会となることを望むものである。

この日の朝日新聞は、日本の報道が原爆・被爆の実情を伝えてこなかったことを社説として告白したのであった。「終戦特集」のあり方を、その真のあるべき姿を、問い始めた。それは、日本人の日本人による世界平和のための特集である。同じ日のコラム「天声人語」もまた、被ばくについて従来よりも踏み込んだ記述をしていた。その冒頭を紹介する。

> 原爆都市。広島のある女学校で、夏の制服をどんなデザインにするかを全校生の世論に問うた。もちろん涼しい半ソデにきまった。ところが一女生徒の腕が原爆のケロイドで醜くひきつっていることに、たれともなしに気付いた。だれも一言もその理由に触れないで、夏服は長ソデに一決してしまった。一人のケロイドへの思いやりから、この暑いのに全校生が長ソデに若々しい腕を包んでいる。乙女心とはいえ、心に刻み込まれた原爆の傷痕は皮膚よりもいえ難いものがある。

17　NHK 第一　午前７時30分放映、『座談会』「日本人の考え方」では「終戦の日から国家優越感を失って劣等感を持つに至った日本人が近く講和を迎えるに当って今後考え方をどう改めるべきか」を目的とした（『読売新聞』「ききもの」1951年８月15日夕刊）。52年の終戦記念日に NHK 第一は『教養特集』で「日本人の良さ悪さ」（長谷川如是閑）を放送している。

18　『読売新聞』「ききもの」1951年８月15日夕刊。

このコラムは原爆第三号が投下されることを強く批判して結ばれた。この社説とコラムが掲げられた８月からこの年の終わりに向けて次々と民間のラジオ放送局が設立されたが、これらメディアの新たな担い手が終戦特集の言論空間を一挙に拡げていくのであった。

1952年、広島原爆の日にNHKは座談会「原爆の日に思う」(13時～14時)を放送し、ラジオ東京(KR)は、ドラマ『原爆の子』(21時10分～10時５分)を放送した。翌７日にラジオ東京は「原爆の子に寄せて」(10時30分～10時45分)を、日本放送は「原爆を目撃した一科学者として」(７時15分～７時30分)を放送した。番組の本数として、必ずしも、原爆特集の数が多いというわけではないが、ラジオ東京の放送した『原爆の子』は、1951年８月、雑誌『世界』に長田新が「ヒロシマの傷跡」として発表したものであった。同年10月には『原爆の子～広島の少年少女のうったえ』として岩波書店から刊行された。被爆を体験した児童の手記105編をまとめた作品であり、これまで、報道規制のため被爆の実態が知られていなかった日本では大きな反響となった。ラジオ東京も相当に宣伝に力を入れたようで、「原爆といえばKRと答える。クイズを地でいったのがKRの原爆記念〝声の攻勢〟で、その執拗なこと、ツンボならざるが恨めし」との番組評が飛び出すほどであった[19]。同作品は1952年には映画化され、多くの国際賞を受賞し、今日でも日本国内のみならず世界で上映会が行われている。

このように戦争体験の回顧は放送メディアの「終戦特集」という枠だけではなく、書籍から始まり、ラジオ・ドラマから映画となり社会に広がるというモデルが出来上がってきた。このモデルから戦争体験をめぐる国民的なドラマが登場した。1952年４月10日、独立講和とほぼ時を同じくして開始されたNHK連続ラジオ・ドラマ『君の名は』[20]である。このラジオ・ドラマは、大変な反響を得ることとなり、52年、放映中にこの作品の脚本家・菊田一夫によるシナリオが書籍化された。同書は翌1953年初頭には早くも５刷りとなっていた。1953年には三部作の長編映画として上映され、その後も、民放各局で繰り返しドラマ化された。このドラマの冒頭で流された次の言葉は有名である。

忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ。

『尋ね人』から『君の名は』へと至る時の流れは、まるで占領下の終戦報道を暗示しているようだ。日本人が日本人を見失い、日本そのものが尋ね人となってしまった時代から、姿はあれどその名が判らぬ日本人の戦争の模索を始めた時代を重ね合わせることができる。そして、その姿は、翌1953年、溢れるばかりの原爆・被爆の特集となって現れたのである。

19 『読売新聞』「ラジオ短評」1952年８月９日。

20 概ね以下の内容である。東京大空襲の際、逃げ惑う中で出会った氏家真知子と後宮春樹は、その晩、助け合いながら銀座・数寄屋橋にたどり着く。二人はそこで名を名乗り合うこともなく、半年後に数寄屋橋で再会することを、もしそれが叶わないのであれば、その半年後に数寄屋橋で会うことを約束し、別れる。その後、二人は互いに会うことを求めながらも、すれ違いを繰り返し、二人は運命に翻弄される。

Ⅲ　独立講和からテレビ放送黎明期

(ｉ)　溢れ出る「原爆」・「被爆」　1953-54

1953年、終戦の日の「天声人語」は、「八月十五日は、終戦八周年の日である。原爆の日は覚えていても、終戦の日は『ほうそうだったか』と忘れがちである」と、少々、オーバーな表現で始まったが、この年の原爆の日こそ、原爆、被爆の物語が放送メディアに溢れ出た年であった。従来、被爆体験をめぐってメディアがそれを扱うようになったのは、1954年のビキニ環礁事件を受けてからのことと理解されてきた面があった。しかし、実際は、むしろ、独立講和前後からメディアによる原爆特集が被爆の真実を社会へ伝播する上で先駆的な役割を担い始めており、この上に第五福竜丸事件の衝撃が重なったのであり、反核運動興隆の基盤は既に作られていたのである。

戦後の放送メディア史上、最初の終戦特集は「原爆特集」として1953年のラジオ放送から始まった。８月５日、NHK 第二放送は、「三十万の犠牲『ある原爆症研究医の手記』」(20時５分～９時）という特集番組を放送し、８月６日木曜日の朝の放送は、当時のラジオ・キー局全てが原爆に関する番組を放送していた（NHK「平和祈念式典実況」(広島、８時～８時30分)、NHK 第二「原爆症患者」(７時～７時30分)、ラジオ東京「原爆と平和への反省」(７時20分～７時40分)、日本文化「原子力の国際管理」(７時５分～７時15分))。ラジオ東京では、この日、「特集・わたしたちの話題」として録音ルポ「原爆の苦しみは続く」(２時５分～２時45分）を、日本文化は「原爆の日の思い出」(10時30分～10時45分）を放送した。翌７日、ラジオ東京は「原爆の歌特集」(９時35分～10時５分）を放送し、藤山一郎「長崎の鐘」、渡辺はまこ「ひとりしずか」・「悲しみの丘」、宇津美清「ああヒロシマの鐘は鳴る」・「ああ広島に花は咲けど」、吉岡妙子「平和の陰に」などの歌唱を流した。

こうした特集の動向を1953年８月12日の読売新聞「ラジオ週評」は「意義ある『原爆特集』」と題し、次のように評した。「広島と長崎のピカドンから八周年、原爆の無残なツメあとをしのびながら平和を祈念する折も折、ソ連にも水素爆弾があるというマレンコフ声明の『投下』となった。どうか心理作戦であってほしいと願う心の強い日本人を、世界のどの国民に笑う資格があろうか。といったわけで、ラジオにきくことしの記念日催しものの数々は、平年とちがって、一段とその意義を深めたかに思われたものである」。そして、民放と比較して、「なんといっても NHK の多角な企画性には及ぶべくもなかった。NHK が常設の番組までも『原爆傷害者助け合い特集』に向けて、世上広く寄金を呼びかけた実践的行動は、さきころの『水害助け合い特集』とともに買われてよい奉仕性であり、能動的な新動向と言えよう」。この番組評から、どうやら、実際には、今日、番組表のタイトルからだけでは読み取れない原爆・被爆関連の放送が行われていたようである。なお、８月９日の原爆特集は、番組表で確認した限りでは、NHK 第一による「原爆犠牲者慰霊式典実況」(11時～11時30分）だけとなる。日程で先行した広島に原爆特集が集中してしまう傾向は、最初の原爆特集の時からのことだった。

この原爆特集の厚みと比べると、この年の終戦特集は、控えめなものに感じられる。朝日のコラム氏の言うとおりである。それでも、51年、52年の独立講和をめぐる心構えのようなものとは性格を異

にした。19日の読売新聞「ラジオ週評」では、終戦特集を次のように評した。終戦時、内閣情報局総裁でポツダム宣言受諾と玉音放送に関与した下村海南と阿部真之助との間で行われた対談「『終戦回顧』が圧巻」（文化放送、16日放送）とし、海南氏の話術と共に「まさに八年前のあの日の再現となった」評していた。他にKRの討論会「婦人は終戦後幸福になったか」、野村吉三郎と緒方竹虎の対談「この日に思う」（以上、15日）などを紹介し、「いずれも好キャッチの回顧的報道性」と評していた。独立講和後の日本人が終戦報道に欲していたこととは、回顧であり、それも真相の回顧であった。占領下の検閲のために、日本人は戦争について、彼らが知りたいと思っていたことを、必ずしも知ることができていなかったのである。

1954年の終戦報道では、この年の３月１日、ビキニ水爆実験による第五福竜丸被爆事件との関連性が注目された。実際、「各局とも六日、九日の原爆記念日を中心に特集プロを編成」しており、NHK・第一ラジオが特集番組「あれから九年」（６日22時15分～23時）で「長崎、広島両市民の複雑な感情、今なお原爆病に苦しむ人々の声」を録音構成としていた[21]。他に「朝の訪問」（第一・６日７時45分～８時５分）、「原爆症患者を訪ねて」（第二・８時～８時30分）などが放送されていた。ラジオ東京では、７日の午後２時20分から「原爆よ永遠に去れ！」と題し、朝日・毎日・読売の各海外派遣員が水爆問題に関する世界の世論について国際電話を利用した録音構成の番組を放送した。文化放送は６日に青空会議「原爆記念日に訴える」（14時15分～15時）を東京・大阪・名古屋をつないで放送し、同日に特集番組「日本にある原爆実験所・ABCC」を放送していた。ABCCとは原爆が人の身体に及ぼす影響を調査するため日本に置かれた米国の機関であり、当時から、ABCCは治療はしないで調査だけをするということ、その調査資料について日本の被爆治療機関に提供しないといったことに批判があった[22]。このことを考えるとABCCを番組でどう取り上げたのかが、今後の検討課題となるだろう。ニッポン放送は、６日に「原子力は人を幸福にするか」（21時35分～22時）、７日に「人類の反省」で有名人へのアンケートに基づいた番組を放送していた。この年も、原爆特集は、先行する広島の６日に集まる傾向にあった。

1954年の８月15日のラジオ番組表には「終戦」やそれに関連すると思われる番組タイトルを11点確認することができた。53年よりは多く、番組タイトルを以下に記すと、NHK第一・「終戦当時をかえりみて」、第二・日曜随想「日本と日本人」、青年の主張「終戦記念日に思う」、ラジオ東京・「終戦と勅額切手」、日曜クラブ「日本の生きる道」、北から南から「八月十五日」、文化放送・「独立国日本」、政治座談会「国際政局と日本の針路」、ニッポン放送・「終戦記念日に思う」、「日本を憂う」。以上のタイトルから言えることは、「日本」がキーワードとなっている点である。日本人にとっての終戦記念日というよりは、日本国にとっての終戦の意味を考えたと言えるのではないだろうか。

この中で、NHK第一が放送した「終戦当時をかえりみて」は、現在、NHKアーカイブスが保管す

21　『読売新聞』「卓上放送」、1954年８月６日。
22　笹本行男『米軍占領下の原爆調査―原爆加害国になった日本』新幹社（1995年10月）。

る番組記録として最も古い終戦特集になる。この番組は、終戦後、最初の内閣総理大臣・東久邇宮稔彦と、同内閣書記官長・緒方竹虎の回顧談であった。これは当時の視聴者にとってスクープ性の高いものであったと思われる。東久邇宮が回想録『東久邇日記』(徳間出版) を出版するのは1968年のことである。当時、東久邇宮は既に雑誌『ダイヤモンド』1952年３月号に東久邇宮稔彦「録音放送第十一回」として終戦時の回想を述べていたが、これと放送内容を比較すると重なる部分もあるが、新たな証言となる部分もあった。勿論、今日の史学検証からすると新たな知見は余りないが、史料として興味深いものになるので巻末にその一部を紹介しておく。

また、放送記録の視聴から感じたことをここで述べておく。まず、放送を聴いて感じたことは東久邇と緒方の親密な人間関係である。これは双方の言葉のやり取りというよりは、発言と発言の「間(ま)」の取り方、そして、通常の所謂、書き起しの作業では削除されてしまう言葉から、非常に強く感じられるものであった。書きお越し作業を行ってみれば判るが、「えー」、「うん」、「あー」等、それ以外に人には様々なコトバの癖があり、文法上、あるいは辞書的な、つまり、正規な表現として意味はなさないが、何らかの感情を表す音声がある。東久邇宮には、発言冒頭に「ああ」という癖があり、これは通常の「ええ」に該当すると思われるが、これを文字テキストとしてしまうと、何か非常に間の抜けた感じに思えてしまう。視聴の限りでは、東久邇宮の個性と直ぐにわかるものである。

短いフレーズや言葉を言いそこなった場合の言い直しなども、所謂、書きお越し作業では、言い直した方の表現だけを書き起していく。しかし、言い直しの時のスピード、つまり、慌ててなのか、慎重になのかなど、そうした点のニュアンスに話者の心情があらわれるものである。相手の発言中になされる相槌や合いの手の言葉なども、書き起し記録では、削除される〈音声が二重になるので視聴が困難なことも多い〉。東久邇宮と緒方の対談では、この相手の会話中に差し挟まれる相槌が非常に多く、ここに双方の信頼関係を読み取ることができる。さらに話をする時のスピードである。よどみなく話しているのか、ゆっくりと慎重に話しているのか、相手の表情を伺いながらなのか、また、話す速度というのは、話す内容に対する話者の心境により変化するものである。つまり、書きお越し記録というのは、そうしたものを削除した上で成り立っている綺麗に仕上がった会話記録なのである。しかし、音声によってしか確認できない信頼関係、親密感というものがあり、テキスト表記で「親密そうに話していた」とされても、実際にそうなのか否かは、そのように表記した人を信頼するしかない。

今後、テレビ放送記録の利用が拡大すれば、これらに加えて表情や、手振り、身振り、視線、目力、姿勢などが加わる訳である。これをテキスト・メディアとして伝える場合には、そうしたことへの工夫が求められることになるだろう。

(ii) テレビ放送黎明期

NHK では、1953年の本放送開始を前に、実験放送を実施していた。なお、この実験放送番組は、その後の NHK の番組の一つの原型となったと考えられる。下記に実験放送の番組記録の一覧を示したが、これはアーカイブスに保管されているものに限られるので、実際に放映された記録の全てではな

いと考えられる。

この実験放送では座談会『番茶クラブ』という番組で「終戦特集」が放映された。「番茶クラブ」は、当時、NHK 第二放送で1952年から始められた番組であり、火曜日の20時30分から21時の間に放映されていた。これをテレビとして実験放送したものであろう。1952年８月15日14時から14時15分にかけて全国放送として行われたこの実験放送番組の記録は、現在のアーカイブスでは台本のみでしか確認できなかった。台本と言っても、発言等が書き起こされているものではないため番組の内容は、出演者などを確認できる程度である。座談会に参加したのは、宮沢俊義、奥野信太郎、緒方富雄、阿部慎之助であった。八月革命説を唱え、日本国憲法制定過程に関与した宮沢俊義、原爆被害調査に参加した医師・緒方富雄、戦前に中国に外務省派遣員として中国に行っていた作家・奥野信太郎、後に NHK 会長となる阿部慎之助とそうそうたる面々による座談会であった。

NHK テレビジョン実験放送番組

放映日	番組名
1952 年 2 月 2 日	今日茶を楽しむ
1952 年 7 月 4 日	里神楽　～神田の種まき～
1952 年 7 月 18 日	バリトン独唱
1952 年 7 月 25 日	天気予報「海水浴シーズンの天気について」
1952 年 8 月 1 日	コーラス・アワー
1952 年 8 月 1 日	空手
1952 年 8 月 2 日	ソナタ（奏鳴曲）ベートーヴェン作曲「春」
1952 年 8 月 2 日	自動車の話
1952 年 8 月 8 日	楽しくテントを「ボーイスカウトの夏」
1952 年 8 月 9 日	おもちゃのバラエティー「笑う門に来た悪魔」
1952 年 8 月 9 日	みんなで仲よく歌いましょう
1952 年 8 月 15 日	番茶クラブ　座談会「八月十五日に語る」
1952 年 8 月 16 日	クイズ・コンテスト
1952 年 8 月 16 日	星の話
1952 年 8 月 23 日	テレビドラマ「新婚アルバム」
1952 年 9 月 5 日	ミシンを上手にかけるには
1952 年 9 月 5 日	琉球民謡と踊り
1952 年 9 月 6 日	楽器の音
1952 年 9 月 12 日	テレビ・ファンタスティク「白い夢」
1952 年 9 月 18 日	ウェスタン・ミュージック

NHK クロニクル　保存番組の公開検索システムより

本放送が行われた1953年の終戦報道を見てみると、８月６日の原爆の日に映画「新しい日本　広島編」（12時～12時20分）を放送している。本稿の最後に紹介する短編映画『広島』と内容的に、どの程度重複するものなのかは不明であるが、放送時間の長さも同じである。残念なことにアーカイヴスの保存記録には含まれていない。終戦の日には20時35分から「終戦八年目の歩み」が放送されていた。

また、1954年の原爆の日、終戦の日の放送では、民放で日本テレビが加わり、二局となるが、番組表からの記録では、まだ本稿が対象とするような「終戦特集」の放送記録は確認できなかった。

Ⅳ 「戦後」の登場と対象の多様化

戦後一〇年にあたる1955年は、原爆から一〇年目の年でもあった。８月６日は各ラジオ局で原爆特集が放送され、番組表上で原爆関連の番組を11タイトル確認することができた。ラジオ東京「めぐり来た一〇年・広島の横顔」(15時５分～16時５分)、文化放送「十年の傷」(14時～14時30分)、ニッポン放送「原爆のきずあと」(16時～16時30分) の三つの番組をまとめて読売新聞「ラジオ週評」(1955年８月９日・夕刊) は次のように記していた。

> 世界平和大会のはなやかな催しのかたわらで病院や裏店やニコヨン仲間たちの間から被災者たちの悲しみや憤りの声が次々にマイクにのった。原爆で三人の子を失い、自分も白血病に苦しみながら残った三人の子を育ててゆく不幸な母親、不具の子を生み続けている若妻の嘆き、ケロイド病でフロ屋からもことわられているという苦しい立場の人、いつ記念碑にその名を刻みつけられるかもしれない運命におののいている人、そしてそういう人たちには何一つ救いの手をさしのべようとしないで、平和の空念仏を売名の道具につかっている人々への憤り。その一々がきびしい現実の批判で訴えでもあった。

この年の終戦の日のラジオ番組には「お米の十年史」(NHK 第二)、「銀座通り十年回顧」(ニッポン放送)、「歌謡十年」(ラジオ東京)、「終戦十年の日本農業」(日本短波) といった終戦後の十年間を回顧するものが中心となった。終戦関連番組は全部で19タイトルを確認することができたが、この中で「戦後十年」といった「戦後」という表記を用いたものが４タイトルであった。表記においても、内容においても、「終戦」から「戦後」への変化が現れた年であった。

もう一つの特徴は、この年、初めてテレビが「終戦特集」の番組の放映を行ったことである。NHK「終戦十年」(19時30分～20時)、KR テレビ (東京放送)「終戦秘話」(19時15分～19時45分)・「十歳の平和国家」(19時45分～20時) である。現時点では、放映されたということ以外のことを確認できていないが、テレビによる終戦特集は、1955年が最初だったのである。

1956年のラジオ番組では原爆記念の特集が一段と強化された。注目されたのが文化放送社会報道部の二人の記者が行った被爆者の現地取材番組「マイク社会面」(14時15分～30分) であり、これは８月６日から10日にかけて５日間連続で放送された[23]。６日に「墓石を作る男」と題し、全身にケロイドが残る41歳の男性が、「最近、体が目に見えて衰弱し」、「妻と五人の子供への愛情に生きているが、国家

23 『読売新聞』1956年８月４日。

も原爆症患者の保護にもっと根本的な対策を立ててほしい」と訴えた。７日は、原水爆禁止世界平和大会の報告を行った。８日は「右腕のない母さん」と題し、「国家の医療保護制度の完備をのぞみ、原水爆禁止協議会への不信と、絶望感をのべる声が余りにも痛々しい」とレポートをし、９日「心のケロイドはいえず」では、「就職試験のときも原爆孤児だというので冷酷に扱われ、今や彼女はあらゆるものを憎悪」していることを伝えた。10日「お母さんがほしい」では広島戦災孤児育成所の原爆孤児の様子を伝えた。この年は、９日の原爆記念日でも、原爆特集が多く組まれ、NHK では、第一と第二をあわせて７つの番組を放送していた。民放でも多くの特集が組まれ、こうした原爆特集に「目の不自由さと戦いつつ生きる私は深い感銘を受けた。そして、次の段階には、その悲惨さを叫ばなくとも、平然と生きて行ける時の一日も早く来るようにと願うばかりである」と評された[24]。

1956年８月15日のラジオ番組表で終戦関連と思われる番組は13本あり、その番組手法にも特色が見られた。NHK 第二では終戦特集「十一年目の日本」(20時５分～21時)を13日から15日にかけて連続して放送した。55分と長い尺の番組は、13日「旧軍人の十一年」、14日は「十年後の経済」、15日「アメリカに負うもの負われるもの」を主題として行われ、13日、15日ではアンケートの結果を発表し、これを材料に識者が議論を行うというものであった。ニッポン放送では、「〝戦後〟さようなら」座談会シリーズを、「社会とモラル」(15日14時30分～15時)、「政治と外交」(15日・18時30分～19時)、「経済と国民生活」(16日・18時30分～19時）と三回に渡って放送した。

この56年の終戦特集の特色の一つとして、旧軍人の言動に対する注目・批判である。読売新聞は荒木貞夫、橋本欣五郎、賀屋興宣といった「ちかごろはこのようなファッショ日本の大立者の発言が活発になり、国民の一部にはまたこれを利用しようという動きが目につく」とし、この種の「A級人種」が「戦争指導の責任などは巣鴨プリズンのタナの上に置き忘れてきたような『言論の自由』ぶりを発揮」し、「凱旋将軍か、予言者のようなつもりになってトクトクと愛国心などを相も変らぬ『指導的』口調で説かれることは真ッ平ごめんこうむりたい」と批判した[25]。

東京放送「私の８月15日」(23時15分～24時）では、荒木貞夫をはじめ「今なお戦犯として巣鴨プリズンで服役している人、引揚者、元特攻隊委員」といった旧軍人の諸相を伝えた。他方、文化放送の特別番組録音構成「十一年目の日本」(12時～12時45分）では、未だ痛ましい戦争の傷跡が癒えてはいない、その他方で旧軍人が台頭し再軍備が行われる状況を「日本の複雑な表情」として捉えていた。そして、これを「傷痍軍人や遺家族の生活、華やかに復活した旧指導者たちの思惑、政府与党の指導者らの考え方、自衛隊員、主婦、高校生たちの生活と意見を通じ、戦争未亡人が今の日本の状況を報告する形」の構成で放送した。

ラジオ放送による終戦報道が盛況であったのに対し、テレビ番組の終戦特集は、「『もう戦後ではない』というお役人の白書を企画面に反映させたわけでもあるまいが、15日の第十一回終戦記念日を中

24 『読売新聞』「ラジオ週評」1956年８月17日。
25 『読売新聞』「編集手帳」(1956年４月15日)。

心とする各局の特集番組は総じて低調」、「幾本かの記録映画がわずかに悲惨な戦争のツメ跡を身近に感じさせただけ」と酷評を受けていた。実際、終戦の日の番組表から見た限り、NHK テレビで記録映画「太平洋戦争」（７時５分～７時55分）・「終戦記念日にあたって」（22時25分～）の二本に止まり、終戦特集らしい番組はこれ以外に見当たらない。

1957年、ラジオ番組の原爆特集は「原爆実験禁止」特集の様相となった。その中心はニッポン放送であった。ニッポン放送は「日本の悲願」、「松下特使帰る」、「原水爆の恐怖」と続けて、原水爆実験禁止特集を放送していた[26]。反核の世論が高まる他方で、ラジオ東京「原子力平和利用の一本化」（６日・６時15分～）といった原発に関わる番組が登場した。原子力平和利用の主題は、56年から少しずつ見られるようになったが、57年にはこの原子力平和利用と反核の双方を結びつけることを意図でもしているかのように感じられる番組がテレビに登場した。東京放送テレビが６日の18時に放映した「原子力平和利用映画『医学』」である。今日、その内容を確認することができず、タイトルに込められた意図は不明であるが、当時、放送された数々の番組には放射能に対する強い懸念があった。例えば、この57年の８月６日には、NHK 第二「放射能許容限度」（19時～19時15分）、８日にも NHK 第二で「原水爆放射能」（18時40分～19時）・「白血病と原爆療養者」（19時～19時30分）が放送されており、９日の長崎の原爆記念日にはラジオ東京「放射能の治療への応用」（10時45分～11時）が放送された。テレビ番組でも、日本テレビ・茶の間の話「食べ物と放射能」（22時30分～）が放映されていた。この時期、「原子力平和利用」を主題とした、あるいはこれと関連した番組の分析は重要な課題となるであろう。

1957年のラジオの終戦特集は、終戦そのものを回顧するというよりは、戦後の十二年間を振り返るといった趣旨の番組が多かった。15日に放送されたものでは、NHK 第一の「母の記録12年間」（13時５分～14時５分）、ドキュメンタリー・ドラマ「ミンドロ島12年の記録」（22時15分～23時）などである。また、ラジオ東京・「伸びゆく子供達」は、５週連続という放送形式をとり、８月１日に第一集「遺された母子」（22時30分～23時）、８日に第二集「12年の歴史」（22時30分～23時）、15日に第三集「十二年の歴史・戦争家族」（22時30分～23時）、22日第四集「差別と貧しさの中で」、29日「僕たちは歌えなかった」。しかし、12年の回顧といっても、それは未だ戦争の傷が癒えぬ十二年間であった。

この回顧が世代を意識する形で作成されたものとして、文化放送・録音構成「父さん母さんはこう教わった」（15時～16時）が注目される。この番組は「お父さんお母さんの世代が明治、大正、昭和にかけて経験した学校教育、家庭教育、社会環境などをドキュメンタリー風に描き、戦後の若い世代に贈るという趣旨」であった[27]。既に前年の56年８月13日、文化放送では「三つの世代」（６時10分～６時30分）を放送しており、この番組では「戦争を境目にして世代が三つに分かれた。戦前派、戦中派、戦後派がそれである。それぞれ大きく異なった環境に生活し、行動してきたこの世代は、これからど

26 『読売新聞』1957年８月３日。
27 『読売新聞』1957年８月11日。

のような関連の下に、どのような役割を果たしていくべきか」を主題とした番組であった[28]。

戦後10年という節目の年から短編映画『広島』が登場する57年までの終戦特集の特徴を概観してきた。その傾向をまとめると、①原爆・被爆問題が中心となり、戦後10年以上を経ても被爆者の心身には痛みが続いていること、②戦争体験のみならず、終戦後からの「戦後」という時代をとらえようとする視点の登場、③世代間の相違と多様性の問題、戦後世代の戦争観・戦後観の問題、④被爆の被害が次世代へ継承されてしまっている問題、⑤放射能への不安、⑥女性、母親の視点、⑦戦災孤児・原爆孤児の問題、⑧独立講和に伴う言論の自由の中で、旧軍人が台頭し、その他方、特攻隊などこれまで軍国主義を助長する要因として報道規制をされてきた戦争の悲劇が登場したこと、⑨平和運動のあり方などとなる。これらの傾向は、何れも60年代以降の終戦特集や戦争に関するテレビ・ドキュメンタリーに、その一つ一つが重要な主題として継承されるようになるものであった。従って、1950年代のラジオによる終戦特集・原爆特集は、戦後のテレビによる戦争ドキュメンタリーの原型と言えるのである。

V　短編映画『広島』の登場

1957年の終戦の日に放映されたNHKテレビ短編映画『広島』は、終戦報道の番組として異色のものであった。まず、第一に、この日、番組表で確認できた範囲で言うと終戦特集は、この『広島』以外に放映されていない。また、国営放送がこれを原爆記念日ではなく、終戦記念日の19時10分から20分間にわたり放映したことは、原爆の悲惨こそ、終戦の日に回顧と展望を行うべき主題であると考えたからではないだろうか。1953年以来、被爆の話がラジオ放送に溢れ出るようになり、そこでは、被爆者たちの悲惨な生活、ケロイド、未だ続く放射能による原爆症の治療がラジオで放送されてきた。ラジオ放送は、日本の被爆者の告発を最初に行ったメディアであり、その取材は広島・長崎を実に多角的に捉えていた。しかし、視聴者はこれを画像として確認することはできなかった。その意味で、短編映画『広島』は被爆後13年の広島の惨状を告発した公共放送として極めて初期の映像ドキュメンタリーであった。本稿は、その映像を是非とも読者に届けたいが、先にも述べたように著作権等の問題から、残念ながら文字によってしか、これを伝えることができない。以下に、短編映画『広島』が伝えた被爆者を紹介しよう。

短編映画『広島』では、被爆当時の被爆者の生々しい写真を紹介していた。日本の映像文化として異例のことであろう。最初に登場した被爆者は映像上の出演ではなく、「当時のありさまを語るおばあさんの声」、つまり、音声のみの登場であり、その音声の背景として、当時の写真が使われていた。それを以下に紹介する。なお、〔　〕による括りは画像の紹介である。

28　『読売新聞』「卓上放送」1956年８月13日。

「あの、逃げる時に電車口にね、裸であそんどった人やなんか皮がひげてくる（皮膚がはげる）、水くれ、水くれ言うてせがんでおられました〔救護所内の写真　被爆者がたくさん倒れている〕。中には奥さんがあかんぼを抱いてくる母がもうやれんから〔写真　やけど・ケロイドの女性〕、もう、よその人にこの赤ん坊、頼むと言うて〔両手両足を天の方向に伸ばしたまま仰向けに寝ている子供の写真、両手・両足は焼けただれ、二の腕、二の足は炭素化している〕、そのまま倒れた方がなんぼもあります。〔床に倒れ横たわる女性、目が空ろである、寝たまま赤子を抱いてあやす女性〕。

ナレーションは「繁華街も見事な復興ぶりを見せ、高層建築が夏空にそびえ立って広島の顔は美しくお化粧されました」とし、繁華街、デパートの建物、高級品の販売の映像を流す。そして、そんな賑やかな広島市の街角にある「ダリエン美容室」を紹介する。ここの経営者が「アメリカのマウント災害病院で手厚い治療を受けて帰った原爆乙女の一人」である。「完全には癒えない傷跡ですが〔お客さんの髪をいじる手は火傷で色が変わっている〕、同じ年頃の娘さんの髪を美しく仕上げて痛む心をいくらかでも慰めています」とナレーションが入った。〔顔のアップなども入るが、右側からの角度からだけで女性を映している〕。

次いで、広島原爆病院の取材になる。ナレーションは「原爆症の恐ろしさに怯える人たち。〔待合室で待つ患者の図〕日赤病院に通じる階段には〔病院の壁の図〕ガラスの突き刺さった跡が今なお残されていますが、それと同じように、一度、原爆の洗礼を受けた体の中には何らかの傷がいまだに消えていないのです」と話す。

病院の取材では、最初に顔が曲がり腫れあがっている女の子の映像が出る。医師の触診・診察に対し、この女の子は「夜中まで眠ったんですよね。一度目が覚めたら、もう駄目なんです」とべそをかきかけながら話す。声は幼く、小学校高学年程度の学齢と思われる。そして、ケロイド治療を受けている女性の図となる。ここは音声がない。足の甲に小さなこぶし程度の大きさに膨れ上がったケロイドがある女性に、塗料薬を塗りガーゼを被せる。とても、それで治癒するとも思えない。

内科の病棟では「悪性貧血〔天井から折り紙の鶴が沢山ぶら下がっている〕、白血病などの患者さんが、死の影と静かに戦って退院できる日を待っています」と紹介され、治療を受けている男性患者の映像となる。ナレーションは「この人は最も恐ろしい白血病と診断されました。白血病が放射能によるものかどうかは議論のあるところですが、広島では他の土地に比べて10倍以上の発生率を示しています。白血病は現代の医学では治すことができないのでしょうか。重藤院長は次のように話しています」と院長の話になるが、院長は「大変、難しい病気です」と答えている。画面は「喪中」と書かれた紙の貼られた壁に切り替わり、葬儀の場面となる。ナレーションは「この映画を撮影しているとき、また一人の犠牲者をだしました。原爆病院に入っていたミズナガさんで、今年になって広島で17人目の犠牲者です」と説明される。祭壇にある写真の男性が映されるが、治療を受けていた男性と似ている。番組でこのことについての説明はない。

番組は、さらに戦後13年を経てもなお続く被爆者たちの苦しみの実情へと迫る。「裏通りに一歩足を踏み入れると、生々しい傷跡が残っています。〔寺社の墓石などがひっくり返ったままの図〕住吉神

社の狛犬などは、爆風で傾いたまま。倉庫の壁は、まだ黒い影をそのまま焼き付けています。その街角には病院にも入れない原爆患者の姿が目に留まります」。

その一人として「悪性貧血で原爆病院に二か月前まで入っていましたが、7人の家族を抱えていては食べていくことができないと、再び激しい職場に戻って」きた男性を紹介する。この男性は「働くのも壱カ月のうち20日くらいで、あとは体が思うようにならず、疲れやすい体を横たえて苦しい毎日の生活を続けて」いた。家で疲れ切った男性は団扇で額の汗を仰ぎながら、何か横になるだけで精いっぱいかのような虚ろな眼である。

次に「妻を白血病で失いわが身も原因不明の痛みに七転八倒する人」を紹介する。この人は激しい頭痛に頭を抱え〔両手で耳を塞ぐような形で側頭をギュッと抑え込んでいる〕、顔面を真っ赤〔白黒映像だが、顔だけ色が濃く映っているので判る〕にして苦しんでいる。「二度、三度、病院を変えましたが、良くならず、自殺したくなると泣く」と紹介されるが、娘が手拭いを額にかけてあげ軽く頭をマッサージのように叩いて看病をしている。そうすると痛みが少しは収まるのだろうか、苦痛に満ちた表情ではあるが、頭を押さえて横になったまま動く動作は収まっている。看病をしている娘さんの思いつめたような無表情、それでいてさめざめと泣き出してしまいそうな胸の内を押さえているようにも見える顔がとても悲しい。ナレーションは「優しいわが子の瞳にいくらかでも苦しみが和らぎます」とあるが、映像には痛みにギュっと目をつぶって横になる男性の顔があり、見ている者には全く和らぐという感じには程遠く、一体、これから先、この親子はどうなるのかということに胸が痛む。

このドキュメンタリーによると「原爆を受けた広島の人たちのその多くが、街の片隅にバラック小屋を建て雨露をしのいでいるありさまで、わずか畳一枚の部屋に寝たままのおばあさんとその孫がわびしく暮らしています」とある。被爆者の集落があるとのことで、取材した「家庭」は、狭い一畳の「家」。その一畳の家におばあちゃんと孫の二人暮らしの「家族」が紹介される。台所代りのような台があるが、狭いのでその台の前におばあさんが寝ている。孫の女性は、そのおばあさんの横に座ると、おばあさんの体越しに食器を洗って片している。そして、「このうちは生活保護を受けていましたが、今年の春、孫の妙子さんが中学校を出て、働きに出るようになると頼みの綱はたちまち断ち切られました。妙子さんは両親を原爆で失い、ただ一人のおばあさんを非常に大切にしています」と、線香をあげ、仮ごしらえの仏壇らしきものに手を合わせている妙子さんを映す。そして、妙子さんは次のように語る。「私、今こそ元気に働いていますが、白血球が多いので、何時原爆症が出るかもしれないと思うと、毎日、毎日がとても不安です。原爆が広島に投下されて13年になりますが、その間におばあちゃんもいろいろと人に言えない苦労をしてきたと思います。でも、私も人にはわからない色々な苦労をしてきました。この原爆のため、わたくしたちは周りの人たちにどれだけ、肩身の狭い思いをしているかわかりません。今の私たちの暮らしは決して楽ではありませんが、前のように生活保護を受けて遠慮しながら生活しているよりは少しは気分的にも楽のように感じます。白血球が多い、おばあちゃんには心配するから言えませんけど、自分ではとても心配なんです」。

これに続いて、このおばあちゃんは「毎日、わたくしは、家におって涙が絶えない、一日として、

たえませんでした。孫も一生懸命、朝の四時に起きて、晩の六時半まで働いて帰ります。そうして帰って、まだ、それでお米を買ったり何かしたりします。ただ生活していて（聞き取り不明）残業するする（聞き取り不明）あたしも毎日、見てもらうことで（聞き取り不明）今では足も思うように立ちませんで、ただ、孫の力で生かしてもろうてるようなもので、孫はかわいそうと、毎日、毎日、戦争が無ければなと思うております。」

この番組は「今日は給料日、妙子さん、お土産に甘いお菓子を二つ買って帰りました。じっとかみしめるその心優しい味」とナレーションが入る。一畳の狭い家の中でたった二つの饅頭を分け合うシーンは、見ているものの胸の奥にまで「心優しい味」が染入り、言いようのない思いが目頭にこみ上げてくる。

番組の最後は、原爆ドームが映され、ドームの脇に風になびく雑草を映す。そして、水辺で遊ぶ子供たちのシーンになり、「広島は人間の未来を信じて生きていこうとする深い信頼と尊い祈りが込められています。再びこの子らに破滅の傷を与えてはならないと。」と結ばれる。この番組で取り上げられた被爆者は、いずれも、未来に困難ばかりが予想され、被爆から13年経た時点でも癒えることのない傷があり、それは今後もさらに続くことを視聴者に印象づけずにはおかないものがある。

むすびにかえて

テレビにおける「終戦特集」の番組形成の歴史を、ラジオによる終戦特集・原爆特集の先行形態として総覧してきたが、ラジオが音声を、書籍が言わばその台本を視聴者に提供し、それを集大成したメディアとして映画が興行されるというスタイルが、『原爆の子』、『君の名は』で形成されていたことを確認することができた。仮に映像メディアが書籍、ラジオを経由した一つの到着点であったとすれば、映像資料として確認し得る最初の戦争ドキュメンタリー・短編映画『広島』を、このラジオからテレビへメディアの主軸がシフトした時代における終戦特集の一つの到着点とみなすことができるだろう。それは被爆者の実像を生々しく伝える映像であり、それ故に一般公開には慎重な検討を要するが、これを非公開とすることは、共同体が共有すべき悲劇、危機という公共性に蓋をしてしまうことでもある。敗戦後から13年間の放送メディアの展開とは戦後の日本人がメディアの中で「終戦の日」それ自体を、「終戦特集」として自己回復するための13年間であった。そして、日本人の日本人による世界平和のための映像の第一歩として、短編映画『広島』が登場したのである。

占領下の民主化から、独立後の民主主義社会で、自己回復を果たし、被爆の真実を伝えようとした放送メディアの姿勢と、その試行錯誤から学ぶべきものは実に大きい。東日本大震災の後の原子力発電所の事故をめぐる報道を、54年前の広島・長崎は、あの時の被爆者たちは、そして、原爆特集を作成したジャーナリストたちは、どう見つめるだろうか。

今日にいたるまでわれわれはまだ日本人の手になる科学的な被害報告を目にしないのである。

〈中略〉 広島の惨禍は、日本人の手によっては、日本人にあまねく知らされていないのみか、また海外にも伝えられていない。〈中略〉 原爆六周年の記念日が、前大戦の最後の悲劇の真実を、日本人の手によって、日本人に、また世界の人々に正確に伝えられ、訴えられる機会となることを望むものである。(『朝日新聞』・社説「原爆六周年」、1951年8月6日)

NHKアーカイブス・トライアル調査　閲覧番組一覧

番組名称	年	月	日
実験放送番組　番茶クラブ　　座談会「八月十五日に語る」	1952	8	15
対談　　東久邇稔彦・終戦当時を顧みて	1954	8	15
NHK短編映画　　都市シリーズ　広島	1957	8	15
日本の素顔　ある玉砕部隊の名簿	1959	5	31
日本の姿　　モンテンルパへの追憶	1959	8	16
日本の素顔　　黄色い手帳	1960	8	7
日本の素顔　　いのちの値段	1960	8	14
日本の素顔　　旧軍人	1961	2	26
日本の素顔　　靖国神社	1961	11	26
教養特集　　日本回顧録　終戦	1962	8	13
戦後(終戦記念日)	1962	8	15
ヒロシマ・語り部の夏	1965	8	15
ある人生　　いのちある日々	1965	8	15
教養特集　　「証言」～戦争体験の記録～	1966	8	12
教養特集　　ある開拓村の昭和史	1968	8	14
現代の映像　　断絶　～23年目の8月15日～	1968	8	16
ある人生　　回天の遺書	1969	7	2
ドキュメンタリー　　特攻慰霊祭	1971	6	18
明るい農村　　村の記録「農民 8・15」	1971	8	15
70年代われらの世界　　平和への道標　～1930年代の世界～	1972	8	15
ドキュメンタリー特集　　第4集　母の肖像　～イクオの戦後～	1975	8	14
特集　　女たちの旅路(終戦記念日)	1976	8	15
重藤文夫(初代　原爆病院長)にきく　わが終戦を語る	1977	8	15
NHK特集　　散華の世代からの問い	1980	12	8

資料　「対談・東久邇稔彦・終戦当時を顧みて」NHK 第一放送（1954年８月15日）

緒方　内閣ができてしばらくの間はかなり物騒でございましてね。毎日、宮城の前に、なんとか、えー、わたくし今名前を覚えていない、めいろう会とかいうものが、10人とか、15人とか並んで二重橋の前で腹を切る。また、そこで腹を切る。それから軍人も大分、杉山陸軍大臣をはじめ腹を切る。それから、なにか右翼の一団が愛宕山に立てこもってですね、それでそれを警視庁でどうにかしなきゃならないと。制圧するしかない。当時は警視総監だったと思いますが、警視総監が一団のなにを連れて行って、そして、あれは、うーん、みんな愛宕山の頂上に向けて突撃をして、みんな空砲を撃ってですね、結局、まあ空砲で迫っていった。そこで右翼の連中はみんな並んで腹を切って死んでしまった。私は数を記憶していませんが、かなりあの間に自殺をした人があります。

緒方　名前は覚えていませんが　２・26の時に関係した軍人が中心になって、どうしても自分ら、このまま敗戦をあきらめるわけにはいかないと、もう一度、起って進駐軍と戦わなければ武士道が成り立たないというわけになって、確か小畑法務大臣を通して殿下にその連中の代表のようなものが二人か三人か来て、総理大臣室で殿下に非常に強い意見を申し上げて、結局、夜、夜中に二重橋の前に殿下にお出ましを願って、殿下からひとつみんなに終戦の趣旨を諭していただきたいと。もし、この際に不祥事が起こっては大変なことになるから、それだけは是非、やっていただきたいと言ってきて、確か、その時、殿下は、それじゃ、俺が行くことによって皆が納得するというなら、どこにでも、いかなる時間でも行くと言われたんですよね

東久邇　行く、と言いました。どこへでも行くと言いました。

緒方　それで近衛と私とで、それはこの混乱の際に殿下が仮に一時間でも、行方が分からないというようなことになったら大変ですから、それはもう是非おやめいただきたいと。それで、確か私はその連中と、向こうから来た旧軍人の連中と談判をしまして、殿下がそこに行かれるよりも、日本中に聞こえるように、殿下からひとつ放送をお願いしよう。この終戦のやむことやむを得なかった理由をはっきり殿下から言っていただき、同時に日本の国体はどこまでも変わらないのだ、護持していくんだということを、殿下からみんなが安心するように言っていただこうじゃないかと。それなら結構です。こういう趣旨を話の間に入れていただきたい。確かその時、巻紙に書いた原稿を今も酒井さんがどこかに持っていると思いますが。それを午後の６時か７時から夜中まで７回か、８回か、30分おきに放送していただいたのです（東久邇　はい、放送いたしました）。それで、そのときのには、向こうの言うことで悉く足りないのかどうか知りませんが、向こうの言うことで、これ軍の上層部はこの事情を知らないんだ。自分ら以下のものがやっているんだと

いうことを言いましたが、果たして翌日、陸軍省の人は何のための放送だっていうのを知らないのですよね。

東久邇　本人たちの言うには、少佐以下の決起である。中佐以上は相手にせずと言ってる。

緒方　それで刻々に水戸、千葉方面の兵隊が東京の方に進みつつある。それが上野に集中して二重橋の方に来るというので、殿下に放送を願うと同時に、自動車で見にやりましたところが、トラックがしきりに外の方に向かって走るものはあるが、こっちに向かってくるものはなかったと。結局、夜遅くわずかばかりのものが二重橋の方へ集ったようでしたけれども、その殿下の放送の結果、それほどのものが、不平の軍隊が集まってくることはなくて済んだのですけど、いずれにしましても、あのころは、今まで負け戦の例がないだけに非常に物騒な…。

東久邇　あれも近衛国務大臣、それからあなたの骨折りで（緒方　いえいえ）まあ、私は現地に行こうと思ったんですけどね、行かないで済んだので結構でした。また、宮城占領なんて計画もなくて済みまして結構でした。

緒方　それからミズーリの艦上で降伏文書に署名する。これ政府の代表と参謀本部と言いますか、統帥部の代表と二人をだすという、結局、政府と統帥部と別々にあるもののような見方ですね。まあ、旧憲法の建前がありますから、そういうふうに言えるかもしれませんが。そこで当時は皆、降伏文書に署名することはみんな喜ばない。職務上、外務大臣が行くのは当然ですけれども、重光外務大臣も、中々、難色があって陛下から強く要求いただいたように思いますが。梅津参謀総長に至っては、陸軍の参謀総長だけでは好ましくないと。もし、どうしてもやれということなら、腹を切って果てかねないようなことを言うて、結局あれは参謀総長、勅命で署名に行くということになったように思いますね。

東久邇　わたくしから陛下にお願いして、両人にお示しをお願いしまして、そして、両人が納得していくようになったのです。

緒方　組閣の初めの一番最初の問題は、マニラに使節をおやりになることで、ご記憶でございましょう、河辺参謀次長が主席になって、そして、陸海軍外務省から、それぞれの人を出してマニラにやった。向こうの参謀長のサザーランドが門接して、そして、降伏文書、その他のものをこっちに持たしてよこしたんですよ。20日でしたか、何かの晩にとっくにつくはずの飛行機が中々東京につかない。ええ、あのころまだ陸軍、海軍共に終戦をあきらめかねておる若い意気のいい連中がおったので、殿下がおっしゃいましたが、ひょっとすると、神風にやられたのかもしれない

と、そういうことがあっては大変だと言うて、帯びとかずに官邸で軍服のままに徹夜をなさったです。そして、やっと明け方になりまして、天竜川の川下より、河口より少し上の方に不時着陸しておりますと聞いた時には本当にホッとしました。

東久邇　あれは、わたくしは、マニラでどういう過酷な条件を示されるのかと思って、あなたをはじめ、近衛公爵も向こうの提出の条件を非常に心配したんです。それで早く使節が帰ってきて、何か報告してもらうことを一時も早く待ってて、みなイライラして一晩過ごしたんです。まず、日本の特攻隊にやられずに、不時着したというので安心しました。それからあくる朝、あの人たちが、総理大臣官邸につきまして、そして、少し休憩の後に報告を受けました。それによりますと、そんなひどい過酷な条件はなくて、まず、日本軍の撤退の線、それから、米軍の進駐の時期などが示されてありました。初めはわたくしは天皇に関すること、軍政に関すること、とてもひどい条件だと思ってそれを心配しておったものですから、あの報告の概要をきいてがっかりしました。まず安心ですね。

緒方　ご安心なさった（東久邇　ええ）。

緒方　あれは新聞社を通じて、当時、国民に非常に感激を与えたものでございます。それにひきかえて、間もなく外人の記者が沢山来ましたね、これは私、横で見とって実に見かねたのですが。あれは、その頭からいうと、実に無礼千万ですよね。それこそ、原稿を突き刺して、殿下の鼻づらを殴りかねないくらいの勢いで（東久邇、笑う）、専ら天皇の戦争責任を追及したと思うんですが、パールハーバーを天皇は知っとったはずだとか、何の詔書は何時でたとか、ということを盛んに追及したもんですよね。

東久邇　あれは、私も、初めはみんなが、百数十名の外人が円陣を書いて（緒方　200人おったんですよね）200人の外人が円陣をかいておとなしく質問をするのかと思っていたら、みんなわたくしのところに詰め寄って来て、まるでけんか腰で腕を出すやら、手を出すやらして、わたくしを殴らんばかりにして、色んなことを質問しましたが、わたくしはここで怒ってはいけないぞと、ここが一番、自分の腹の決め何処だと思って、しっかり、実際のことを（緒方　非常に冷静におやりになった）、冷静にやりました。それで、オーストラリアとか、ニュージーランドの記者も随分、私を殴らんばかりの手つきで色んなことを聞きましたけれど、とうとう、話が喧嘩にならずに、うまく話をつけることが出来ました。

緒方　それから、その次、今度は九月の始めに、二日間、議会を開きましたね。そして、殿下が敗戦にいたるまでの経過を議会を通して国民に知らせると、国民の了解の下にやらんと、非常に

長い演説を、大きな声で。あの演説、草稿を作ります時にですね、陸海軍、特に陸軍からですか、陸軍は負けていないんだというようなことで、盛んに干渉してきたものです。参謀本部からも、陸軍省からも。これを殿下は陸軍大将でおられて、何時も、何時もですけれども、一切、お入れにならずに、何を言うかと、俺は今、陸軍の責任は、俺が持っているんだと。その吾輩が軍事参議官をしているときには、陸軍当局者に向って、多少、意見あっても何一つ言わなかったじゃないか。今日こそは、俺が責任を持っているのだから、君らの意見は一切、採用相ならんと言うて、非常に手厳しく断られたことがございましたね。

東久邇　ああ、あれはあなたに草稿を作っていただいたんですけど、あの草稿で、実情を暴露する場合に、ええ、陸海軍、特に海軍から文句でました。

論文概要

夏のテレビ番組として「終戦特集」は重要な定番化した特集となっている。８月15日とは〝戦争と軍国主義の時代〟と〝平和と民主主義の時代〟の分水嶺であり、その回顧と展望は現在の精神史的な位置を確認するという意味を持つ。この「終戦特集」とは、どのようにして始まり、形成されたのか、これを明らかにすることが本稿の目的である。

この研究の契機の一つとなったのがNHKアーカイブス・トライアル研究への参加であった。この研究に参加を認められたものはNHKが所蔵する過去の番組を学術研究目的に限定して閲覧できる。この調査からテレビの「終戦特集」の先行形態としてラジオによる「終戦特集」の存在があることが判明した。そこで占領期のラジオ番組から1957年８月15日に放映された日本のテレビ放送で最初期の「終戦特集」・「短編映画『広島』」が登場するまでの「終戦特集」の変遷をまとめることとした。

「Ⅰ　研究の諸前提」ではトライアル研究を紹介し、敗戦後から1950年代までの放送メディアの概観を確認する。

「Ⅱ　占領期の『終戦特集』」では、占領軍による報道検閲制度について概観し、1946年～48年の事前検閲制の時期を「(ⅰ)「終戦特集」不在の時代」として、事後検閲もしくは検閲制廃止以降の1949年～50年の時期を「(ⅱ)　自己検閲の時代」として、そして、独立講和前後の1951年～52年に徐々に反核へと終戦報道が向かった時期を「(ⅲ)　独立を模索する終戦報道」として、占領期を三つの時期区分から分析する。

「Ⅲ　独立講和からテレビ放送黎明期」では、1953年～54年、規制からも解き放たれたメディアの二年間を、「(ⅰ)　溢れ出る『原爆』・『被爆』」として独立後、最初の原爆の日・終戦記念日となった報道の傾向について触れ、この時期に始まったテレビ放送の終戦特集を「(ⅱ)　テレビ放送黎明期」としてまとめた。

「Ⅳ　『戦後』の登場と対象の多様化」では、戦後10年となった1955年～57年までの３年間に、60年代のテレビ放送における「終戦特集」の基本的要素がラジオ番組が主導する中で形成されていった状況をみていくことにする。

「Ⅴ　短編映画『広島』の登場」で、この変遷の終着点であり、戦後のテレビによる終戦特集の出発点となった短編映画『広島』の内容を紹介する。

これは敗戦・被占領により、自己喪失した日本のメディアが〝占領下の被占領による占領のための放送〟から〝日本人の日本人による世界平和のための放送〟へと向かった軌跡である。